

タイトル：夏毛 *Zomervacht*

作者：ヤープ・ロッベン Jaap Robben

訳者：川野夏実

原本7ページから21ページまで

第1章

7ページ

ただのドライブだと思っていた。干し草が飛んできて、ピックアップトラックの開いた窓から入り込んでくる。今は収穫のシーズンだけど、僕たちには関係のないことだ。荷台では、昨日路肩で拾った錆びた暖房の配管と洗濯機がガタガタ音を立てている。父さんはハンドルを切り、ガソリンスタンドに入る。

「何か食うか」満タンまで給油しながら、父さんは僕に尋ねる。ベノワが出勤している月曜日だけできることだ。店長は僕らには何も売ってくれない。僕らみたいな客が来ると損をする。店長はそう主張する。

干し草の俵を積んだトラックがせわしく通り過ぎ、ここじゃいつだって割引して売られているコーヒーのセールを宣伝する色あせたのぼりがバタバタとはためく。そのコーヒーはまるで屋根葺と一緒に挽いたような味がする。

「こんにちは」僕はベノワに向かって言う。入店ベルが甲高く鳴る。「君たちは中に入っちゃダメだよ」ベノワはカウンターのガラス越しに答える。口をマイクに近づけすぎている。「すでにこの間そう言ったはずだけど」

僕はレジの方を指差し、聞こえないというふうに耳に手をやった。「だから、君たちは…」僕は首を振って再び耳を指差す。レジの周りに積み上げられた木炭袋の壁のせいで、まるで彼が僕たちから身を守っているように見えた。

8 ページ

その横のバケツには枯れかけの花束が入っている。僕はエナジードリンクの入った冷蔵庫のところでぐずぐずしている。天井に設置されたミラー越しに、ベノワは僕を目で追おうとしている。再び入り口のベルが鳴る。

「ベノワ！」父さんは友好的に呼びかける。

「さっきブライアンにも言ったけど、あんたたちに売るものは…」

「これもいっしょに」父さんは見切り品のワゴンから大きなチョコレートエッグを取り出した。「こいつの兄さんへのプレゼントなんだ」

「ルシアンのところに行くの？」

父さんは防犯ガラスに値段シールを押し付ける。「この半額だ」大きな赤いシールを指で剥がしながら言う。「いや、貼ったままでいいか。どうぞ見やしないんだ」

「やれやれ」ベノワはぶつぶつ言いながら割引かれた値段を打ち込む。

「こいつにたっぷり青いリボンをかけてやってくれよ、喜ぶからさ」

「値下げ品は包装できないんですよ」

「赤いのも構わないよ」

「だからダメなんですって」

「他になんかいるか？」父さんは僕に向かって言う。

僕は首を振る。

「いくらになる？」

ベノワは怯えながら、レジを見つめる。「38.25…」

「はいよ」父さんはレザーの上着の内ポケットから大量の小銭を取り出し、窓口に置かれたトレーに放り投げる。

「こいつもおまけだ」ズボンのポケットからズボンのポケットから10ユーロ札を取り出し、丁寧に広げ、しわを伸ばす。

9 ページ

「こいつをちょいときれいに包んでくれるかい？」

「まずは合ってるか数えないと」

「かなり急いでるんだ」

ベノワは緊張した面持ちでコインを数え始める。

車に戻るより前に、チョコレートが溶けて、すでにセロファンにくっついている。

父さんが大股で歩く後ろで、青いリボンがたなびいている。「ほら、来い、ブライ」

「本当にルシアンのところに行くの？」

ベノワが店の外に出てきた。「あと7. 25ユーロ足りませんよ」

振り返りはしたものの、父さんは後ろ向きで車の方に歩き続ける。「ちゃんと数えたのか？」

「全然足りませんよ」

「そんなわけない」父さんは驚いた顔を試みせる。「それに俺たちは、ちょっとばかり急いでるんだ。こいつの兄さんが待ってるんでね」

「警察に通報しますよ」

「ずいぶん厳しいこと言うねえ。常連をそんな風に扱うってのか？」父さんは歩調を緩める。「明日、残りを持って来るからさ」

「それだと、僕はいないんです」

「仕方ないな」父さんはニヤリとする。「じゃあ立て替えといてくれ」

僕たちは再び車を走らせる。ベノワはドアのところに立っている。父さんは親しげに手を振り、親指を立てる。ベノワはあいまいに手を振り返す。

「どうしてルシアンのところに行くの？」

「そろそろ頃合いだと思ったのさ」

僕の兄さんは僕らのキャラバンから車で30分のところに住んでいる。最後に会いに行ったのは兄さんの16歳の誕生日で、その前はクリスマス頃だったはずだ。

そのとき兄さんが寝ていたことは覚えている。やっと目を覚ました時、兄さんの目に入ったのは、ヒーターの上で踊っている、窓につけられたクリスマスの飾りだけだった。母さんと鉢合わせしたくないので、クリスマスや誕生日の当日に行くことはない。今だって母さんの車が駐車場に止まっていなければいいと思っている。

正面入り口の横で、目がクリっとした男の人がこちらをじっと見ている。おでこが顔の大半を占めている。革製のヘルメットの間隙から黒い髪の毛がのぞいている。まるで僕らが長いこと面会に来ていないことを知っているかのように、厳しい表情をしている。ここの建物に入るとすぐに、いつも僕はナーバスになる。あまりに長く来ないことをルシアンが怒りやしないか、何か僕らが知らないことが、ルシアンの身に起こってやしないか。それより何より、ここが僕らではなく母さんのテリトリーだから怖いのだ。

車いすやワゴン、キャスター付きベッドのせいで、白い壁には腰の高さまで傷や線、へこみができている。廊下には見渡す限り、考えられうる、ありとあらゆる装備の車いすが止まっている。さらにごみ袋が備え付けられた、トレーと汚れた皿でいっぱいのワゴンが見える。部屋の一角の青いマットの上で男の人が仰向けの姿勢でうめいている。その足は考えられない角度にねじれていて、まるで実は別の体についていたものを、あとから彼の胴体に縫い付けたかのような。システム天井から落ちてくるはずの誰かを、手を広げて待ち構えて受け止めようとしているみたいだ。

「ブライ！」父さんはもう廊下の一番奥まで行っている。「ここを見てもろ」自動ドアが閉まりかけるが、父さんが立っている位置のせいで、すぐにまた開く。ここではすでに誰もが皆すごくゆっくり動いているのに、父さんの後ろで、マリア像が落ち着きなさいと言っているような手の形をしている。

「ルシアンのお部屋はあそこだったよな？」半透明のビニールが張られ、細い廊下の入り口が塞がれている。建物内のどこかでドアや窓が開くと、ビニールが一気に吸い寄せられ、その後またすぐにぼりぼりと音を立てて膨らむ。その後ろではドリルが使われている。手押し車を押す姿が見える。

「よそに移ったのか？そんなはずはないな、それなら母さんが知らせるはずだ」チョコレートエッグのセロファンが手の中でカサカサ言っている。

「この辺のどれかじゃない？」ランダムに割り振られた部屋の名札を見ていく。一つの部屋の中からうめき声がある。「受付で聞いてみようか？」

「ルシアンはどこに行っちゃったんですかね？」父さんはチョコレートエッグをカウンターの上に置く。「部屋はなくなっていて、俺たち何も聞かされてないんですがね」

「ちょっとお待ちくださいね」女性が応じる。「これを打ち込んでしまいますから」名札にはエスメーと書かれている。父さんがこの後絶対に冗談を言うに違いのない種類の胸がブラウスの下に隠れている。父さんの目はニヤついている。エスメーは人差し指でエンターキーを押し、デスクチェアを後ろに下げ、僕たちの方を親切そうに見る。

「ルシアンに会いに来たんですがね」

「ルシアン・シュバリエですか」

「こいつの兄さんです」

12 ページ

「あら…兄弟がいたの」 エスメーはそう言いながらも僕の顔を見ない。

「ええと、それで、あなたは？」

「父親ですよ」

「ああ、もちろん…」

「ルシアンはまだここにいるんですかね？」

「ええ、ルシアンは一時的に106号室にいます。改築のために院内で引っ越しをしないとイケなかったんです」「この廊下を通過して2つ目の角を左に行くと、右手の3つ目のドアです」と部屋の場所を尋ねる前に、行き方を教えてくれる。

「わかりました」と父さんは言うと、その視線は彼女の胸を捉える。多分もう頭の中では冗談を言っている。ニヤついている。こめかみを2度、指で弾く。「じゃ、失礼しますよ」

廊下ごとに入居者の顔写真にスーパーヒーローの絵をコラージュしたものがかかっている。

「なんと、なんと」父さんはニヤついている。「あれは2つの大きい買い物袋だったなあ」

「え？」

「あのおっばいの谷間に住みたいもんだ」

「101号室」と僕は大声で読み上げる。「ここは103号室。ルシアンは部屋の反対側だよ」

「ちょっと覗いてみるとするか」父さんはつぶやく。「もし寝ていたら、長居はしないことにしよう」

ルシアンはネームプレートは黄色と青で塗りたくられていた。おそらく誰かスタッフがルシアンの指にペンを握らせて描かせたのだろう。

「いいか？」父さんはすでにドアの掛け金に手をかけ僕の方を見ている。

「ブライ？」

13ページ

僕は頷く。父さんは、昔、僕のぐらぐらした乳歯を引っこ抜いた時のような毅然とした態度でドアを開けた。窓が開いていて、閉じたブラインドがカチャカチャ当たっている。薄紙でできた鳥がひもで天井にぶら下がっている。その下にルシアンが寝ている。後頭部のゴワゴワした髪は絶対に櫛が通らないみたいにはねている。下半身はまっすぐ毛布の下に、上半身と顔は僕たちと反対の方向を向いている。最後に来た時からまた成長して、体がよりベッドの端に近づいている。小さな変化がある。眉毛が濃くなった。下唇は聖水杯のように、より外に突き出ている。おでこの髪の生え際にニキビがある。

「ルシアン？」うっすら目が開く。目尻には黄色い目やにがくっついている。母さんだったらすぐにとってやるだろう。

「君はルシアンだよ」僕は兄さんに自分のことを思い出させるために言う。「また来たよ」そして自分の胸を指差す。「ブライアンと父さんだよ」ベッドのそばに立つのに、二人分の十分なスペースを作るために、僕は少し横にずれる。それにも関わらず、父さんは僕の半歩後ろに立ったままだ。不必要に咳をする。僕はもう一步横にずれて、隣に来られるよと手招きする。

「ここでいい」父さんはそう言いながら、僕の手チョコレートエッグを押し付ける。「お前の兄さんに」

すでに受け取ってしまったものの、僕は父さんに自分で渡して欲しかった。「父さんが渡しなよ」と小声でいいながら、返そうとする。

「いいから、お前がやった方がいい」父さんはそう言って、手をポケットにしまっ
てしまう。ルシアンが僕たちの方を向いたので、僕はチョコレートエッグを少しの間ルシアンの顔の前で止めて見せてから、棚の上に置く。

14 ページ

味見してはじめて、ルシアンはチョコレートが何かを理解した。

「2、3ヶ月ぶりだね」ルシアンに触れたかったが、どこに触れたらいいかわからなかったから、手はベッドの端に置いたままにする。頭の横にあるマグネットボードには、端が丸まった車椅子姿のルシアンの写真が貼られている。隣に母さんがしゃがんでいる。たくし上げられたレギンスは母さんのお腹を二段に分割し、髪は

ポニーテール、何千年と変わらないショルダーバッグを両手で握りしめている。その上にはディディエと撮った新しい写真。全部の写真がそうであるように、母さんはディディエに自分を抱きしめさせ、自分の頬を相手の頬に寄せて、彼がどれほど自分のことが好きかを僕たちに見せつけている。父さんはいつもディディエの名前をイライラした声で呼ぶ。

母さんは自分たちの写真をいつも真ん中に貼っている。その後ろには、ルシアンも混じった入居者たちの集合写真が半分隠れている。遊園地の入り口で撮られたものだ。兄さん以外は全員レンズの方を見ている。唯一ルシアンが微笑んでいる写真は、モルモットを誰かの手がルシアンの頬のそばに持っていつているやつだ。

右下には僕の写真が貼ってある。マグネットで顔が半分隠れている。それは母さんが財布のパス窓に入れているパスポート写真と同じものだ。ちょうど前歯が生え変わったところだ。しっかりと櫛を通してジェルで固められた髪。その時、自分を大きく感じたことをいまだに覚えている。耳に小さなリングピアスをあけたばかりだ。それから、写真には写っていないが、首の後ろはネズミの尻尾のようなヘアスタイル。「ほら」とルシアンに言う。「これが僕だよ」僕はすぐにまた、ルシアンに話しかけることに、いつもの居心地の悪さを感じる。ルシアンが何も答えないのが大きな理由だ。大人ならもっと上手にやれる。その場合、犬に話しているように聞こえるけど。

15 ページ

ルシアンは僕たちが入ってきてから天井で静かに揺れている紙の鳥に向かってあくびをする。「部屋を少し明るくするぞ？」父さんはすでにブラインドのコードを引いている。入居者が外に落ちこまないよう、窓は全て金具で固定されていて、少し

の間しか開かない。ルシアンはベッドから、夏は最も遠いところある。建物全体がそうだ。ここではモップがけされた床から屋外プールの匂いがする。

急に明るくなってルシアンは目をつぶり、それから開けて、また短く閉じる。そうと思えば、どうして目を閉じたのかを忘れたかのように、また希望いっぱいを開ける。

窓の外の枯れた芝生で入居者二人がテニスをしている。とにかくボールを打っている。ラケットを宙で振り回し、遅すぎたり、空振りを繰り返したりしている。次に打つためにゴムボールを探して拾う。二人とも腰を落とし、真剣な目をしている。1人はラケットのグリップを両手で握っている。もう1人は自分のラケットを置いて、ボールを両手で投げる。スイング。空振り。茂みの中を探す。

「お前の兄さんは寝たがってるんじゃないか」父さんは、ルシアンをそっと揉む。足は体の中で唯一毛布の中にあるので、触っているようで本当は触っていない。「コーヒーを買ってくる」父さんはドアの方に行く。「すぐ戻るよ」記録更新だ。いつもなら立ち去るまでの時間はもう少し長い。

「ルシアン？」僕は尋ねる。「チョコレート食べる？」リボンがきつく結ばれているので、ルシアンの前でほどいてやる。セロファンのカサカサ言う音にルシアンは興味を示し、窪んだ枕から頭を上げる。

16 ページ

「ほら」卵をこぶしでたたいて、茶色いかけらにする。「兄さんのだよ」先の丸いチョコレートのかけらを顔の前に持っていく。「食べる？」ルシアンは体を揺らし

始め、僕はかけらを口に放り込む。歯並びの悪い歯は僕の記憶より小さかったが、それはたぶん頭がまたいくら大きくなったからだ。ルシアンはチョコレートをしゅぶり、味わい、噛み砕く。その間、腕を斜め上に上げ、目に見えないピアノの鍵盤をのろのろ指で弾いている。

「もっ、もっ、も！」

「もっとほしいの？」おどけるように新しいかけらを目の前に持っていく。あんまり口を大きく開けるので、口角が裂けてしまうのではないかと怖くなる。それでチョコレートをあげることにする。ルシアンがまだ家に住んでいた頃、僕にはルシアンの発する声から言いたいのがわかった。テーブルの上の食べ物に手が届かないこと。掃除機を見て怖がっていること。

「ブライアン」僕は言ってみせる。「ブライアン」って言ってみて。「そうしたらもう1つあげるよ」僕は出窓によじ登って、靴のかかとで軽くヒーターを蹴る。

「ブライアン」僕は繰り返す。「ブライ・アン」

突然、ルシアンは激しく体を揺らし始め、ベッドの脚の下に付いたキャスターがきしむ。ルシアンは僕の方に腕を伸ばす。指を空中で動かしている。「僕のこと？思い出したの？」僕はマグネットボードの自分を指し示す。ブライアンは顔を歪ませ、僕を通り越して外を見ている。「テニスが見たいの？」

僕は体の向きを変えてぎょっとする。女の子が頬を窓ガラスに押し付けているのだ！「誰？」女の子は顔の向きをもう一方の頬の方に変え、窓ガラスに鼻を押し付けて脂っぽい痕をつける。

ルシアンは僕が今までに聞いたことのないような声で唸る。その女の子は髪を頭の後ろでひとつに結んでいて、耳をカーテンのような黒髪で隠している。ガラスについた花粉を舌でじっくり舐めて汚れを掃除している。それから後ろに下がって出来栄えを眺める。窓枠を両手で掴んでいる。「知っている子？」女の子はたった今、僕に気づいた様子で、僕に微笑みかける。ここに住んでいるのか、僕のように誰かを訪ねてきたのかはわからない。

「兄さんの彼女？」

ルシアンは興奮してむせ、白目に血管を浮き上がらせ、息を吐き出す。

女の子は両手でルシアンに手を振る。僕が背中を叩くと、少し落ち着く。女の子がいなくなると、また咳をし始める。唾液が唇やあご、シャツに飛び散る。「落ち着いて。息をして」サイドテーブルからストロー付きマグを取って、唇の間にストローを押し込むと、ルシアンは頭を激しく振り始める。「落ち着いて、落ち着いて」ルシアンはマグを口から跳ねのけようとする。僕は偶然、誰かが廊下を通りかかって助けてくれることを願う。ルシアンを1人残して、人を呼びに行くのは怖かった。幸い、ルシアンの呼吸は落ち着いてくる。もう何回か咳をする。「大丈夫？」何度か唾を飲み込む。水の入ったマグを唇に傾ける。二口吸うと顔をマグから背ける。「もっと欲しかったら言ってね」僕はそう言うと、マグをルシアンの目に入る窓際に置く。

「あの子、彼女か何かなの？」窓の下に隠れているかもしれないと思って見てみるが、見えるのは苔の生えた石畳と、細長く敷かれた緑色に変色した小石だけだ。

「あの子、よくこんなことするの？」

もちろん返事はない。

ドアが開く音がする。父さんがコーヒーを持って戻ってきたか、ケアスタッフの誰かだと思った。ドアノブが斜め下に下がっているので、誰か向こう側にいるはずだ。「誰？」窓舐めの女の子がドアの隙間から覗いている。

「君だったの」女の子はクスクス笑いながら、後退りする。

「中に入っていいよ」

ドアが開く。「ここだよ！」女の子は腕を宙に放り出して嬉しそうな声をあげる。女の子と呼ぶには年齢が上に見えるが、まだ大人の女性でもない。すでに胸の膨らんだ若い女の子といったところだ。ランプシェードのようなスカートを履いて、右足が内側を向いているので、歩くたびに右足で左足をひっかけて、つまずかせたがっているように見える。彼女はルシアンベッドのそばに立つ。自分の目で僕目をじっと見つめて、僕の瞳孔を通じて僕の頭の中を読み取ろうとしている。

「ブライアン」僕は言う。「それが僕の名前だよ。君は？」

「シェルマ」

「よろしく、シェルマ」

「違う、違う、シェルマよ」

「シェルマ？」

「真似しないで！シェル・マ！」彼女は指でミニーマウスのついたシャツをスカートから引き出し、顎のところまで持ち上げる。その下に着た黒い肌着から名前シールを剥がす。

19 ページ

「見て」彼女はぶっきらぼうに言う。粘着面は繊維がついて黒くなっている。シールを胸元にもう一度貼り上からこする。「これをつくはず」

「セルマ」僕は声を出して読む。

彼女は得意げに頷く。

「君もここに住んでるの？」

彼女はおでこにシワを寄せる。「ほとんど新しい」

「じゃあ、どのぐらいここに住んでるの？」

「1週間より大きい」セルマは思いがけず、大きな声を出す。

彼女の口から出る言葉は僕が発音するときよりも丸っこく聞こえる。

「2週間？」

「もっと大きい！」

「1ヶ月？」

「そうかも」

彼女は首を傾げ、まるで僕が答えを知っているに違いないという風に僕を見つめる。「ここの前はおばあちゃんと住んでたの」

ルシアンは僕たちの方に目一杯体をひねる。

「ルシアンのごことはもう知ってるわ」と言うと、ぎこちない足取りで僕の横を通りすぎ、ベッドの方に行く。「私のこと、好きよね？」ルシアンは唸る。「私のこと、好きよね？」彼女はルシアンの顔を両手で挟み、口をタコにする。一瞬、ルシアンにキスをするんじゃないかと怖くなる。セルマが親指で目の下の辺りを撫でると、ルシアンは怯えた様子で目をパチクリさせる。

「あんまりいい気持ちではなさそうだよ」と僕は言う。

「そんなことないわ」さらに今度は閉じた目の周りをこする。ルシアンの首の筋肉は強張っている。顔から手を払い除けたそうに見える。同時に、指の強張りはおさまり、ゴツゴツした枝のような状態から普通に帰っている。セルマが急に顔から手を離すと、再びベッドに横たわる。

20 ページ

「フッフムムム、フッフムムム」口をバナナのように曲げて笑っている。

「僕の兄さんだよ」僕は言う。

セルマは僕の方を向き、拳を腰に当てる。その間、ルシアンは震え、声を発しながら、彼女の手を再び自分の顔に引き寄せようとする。

「だめよ」セルマは厳しい口調でいう。「仕事しなくちゃいけないの」片方の手でベッドのパイプを、もう片方の手を僕の肩を掴んで、やっとのことでベッドと僕の間を通る。

「まだ戻ってくるつもり？」

彼女はのそのそと部屋を出て行き、廊下に出る。ルシアンは彼女を目で追おうと身を乗り出す。

「行っちゃったよ」僕は言う。「もうちょっとチョコレート食べる？」ルシアンは後ろにもたりかかり、指先を心もとなげに布団の下にもぐらせる。

「僕も同じことしてあげようか？」顔を両手で挟み、唇がやかんの注ぎ口のようになるまで頬を押した。口をもぐもぐさせているのがわかる。僕は慎重すぎるのかもしれない。親指で目の下を撫でる。しばらく撫で続ける。手を離すと、ルシアンは後頭部を後ろに打ち付ける。セルマの時のように笑わない。

廊下にはもう彼女の姿はない。父さんはまだ喫煙所で時間を潰しているのだろう。

「ちょうど探そうと思ったところだよ」僕が中に入るなり、父さんは言う。「今、お前たちのところに行くところだった」

「ルシアンはまた眠ったよ」

「なんだ、じゃあ、行っても仕方ないな」父さんはコーヒーマシンの方に向かう。

21 ページ

「お前もいるか？」僕は首を振る。隅のテーブルに、長い髭を蓄えた禿げた年配の男性が座っている。髭を半月状に切り揃えている。まるで火を起こそうとしているかのように、親指と人差し指を擦り合わせている。もう一方の人差し指の爪でテーブルをたたいている。この男性はどうやら字が読めるようだ。半分に折られたタバコの箱に、「ジャック、新しいタバコはきっちり1時間ごとに一本まで」と書かれて

ある。彼のトラベルクロックによると、12時を数分過ぎたところだ。コーヒーマシーンがガタガタと音を立て、静かになる。父さんはマシーンがもう一度動き出すまで、せっかちに青いボタンを押す。「あのけちどもが機械を調節したせいで、いつもカップに対してコーヒーが少なすぎるんだ」コーヒーがカップから溢れ出す。

「見る、コーヒーってのは、こういうのを言うんだ」

一人のケアスタッフが通り過ぎると、僕は急いで廊下に出る。「ズービダ！」彼女が振り返ると、ビニールのサンダルからキュッと音がする。

「あら、ブライアン、久しぶりね」父さんには控え目な微笑みを向ける。

ズービダは僕が大好きなスタッフだ。「もうここでは働いてないと思ってたよ」

「いますとも」彼女は手でおなかをさする。

「私、お母さんになったの、それで…」

「そりゃ、よかった」と父さんが言う。「子作りはよく考えてから始めたほうがいいぞ」と言うと僕の肩をポンとたたく。

「そんなこと、今、言っても遅いわよ」ズービダも冗談を言っていることに父さんが気づくするには少し時間がかかる。しかし、そうとわかると、父さんの笑い声は廊下中に響き渡り、みんながこっちを振り返る。ズービダは僕にウインクする。

「さ、行かなくちゃ」と言うと、まるでまだできることがあるかのように、僕の裂けた耳たぶを何気なく触る。会った時は、いつも決まってそうする。「かっこいいわよ」「さよなら」自分の顔が赤くなるのがわかる。父さんと一緒に出口に向かって歩く。

「さて、また戻ってきましたよ」父さんは受付の女性に手で挨拶したが、女性はパソコンの画面から目を逸さなかった。

(第1章終わり)